

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月17日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520563

研究課題名（和文） アルメニア語の e-ラーニング教材の開発と電子版学習辞典の編纂

研究課題名（英文） Development of an e-learning courseware of the Armenian language with the compilation of an electronic learner's dictionary

研究代表者

岸田泰浩（KISHIDA YASUHIRO）

大阪大学・日本語日本文化教育センター・准教授

研究者番号：40273742

研究成果の概要（和文）：

本課題は、アルメニア語の e-ラーニング教材の開発と電子版辞典の編纂を目的として遂行した。研究期間前半で作成したデータベースから学習教材という視点で文法項目や基礎語彙を抽出して再整理し、特にアルメニア文字の提示方法に重点をおいて教材サンプルを作成した。電子辞書については、単なる語彙集にならないように、品詞・不規則活用・構文情報等を記載し、アルメニア語学習に役立つ情報を積極的に取り入れた。また、基礎資料として蓄積した文法データベースそのものも、今後のアルメニア語研究に活用できる付随的成果となった。

研究成果の概要（英文）：

This project aims to develop an e-learning courseware of the Armenian language and to compile an electronic learning dictionary of the language. Reorganizing the grammar items and basic vocabulary in my original database from the perspective of foreign language study, I constructed some model materials of e-learning with special emphasis on the ways of displaying the Armenian letters. Rather than a mere collection of words and translations, the electronic dictionary provides the learners with grammatical descriptions such as parts of speech, irregular conjugations, syntactic information, etc. Furthermore, the database on the Armenian grammar compiled as a fundamental resource has turned out to be a by-product usable for researches on the Armenian language.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：アルメニア語、e-ラーニング、電子辞典、コーカサス、evidentiality

1. 研究開始当初の背景

アルメニアは、4世紀頭にキリスト教を国教に定めた世界最初の国であり、5世紀初めには聖書を翻訳し、キリスト教を布教する目

的で独自のアルメニア文字が創られた。しかし、かつてソビエト連邦に属していたことに加え、言語自体があまり知られていないためにその地域の文化などについての直接的な

情報が一般的なレベルで国外に伝わっていないのが現状である。このような状況下で、文化の中核をなす言語についての知識を持つことが重要であるのは言うまでもない。

研究代表者は、かねてよりコーカサス地域に分布するアルメニア語やグルジア語についてその文法の記述や言語的特徴の整理を続けてきた。しかし、初歩的な問題点の一つには、当該の言語が独自の文字を使用しているために、原語固有の文字でデータ蓄積することが容易でなかった点がある。確かにASCIIコードをもとにしたアルメニア文字フォントを利用すれば、画面上も印刷上も問題の言語を書くことが可能であったが、見かけ上ラテン文字と異なってもコンピュータシステムにとっては他の関連のないはずのラテン文字と同一のコードであり、アルメニア語のデータを適切に処理するには極めて不便であり、十分な互換性も維持できなかった。ところが、現在では、世界中の言語の文字をユニバーサルに規定する、つまり、個々の文字に唯一のコードを当てはめるべく策定された文字コード体系であるUnicodeをWindows等のOSが実装し、アプリケーションソフト側での対応も進んできた。今や独自の文字を持つ言語でも世界で共有できるデータベースをパソコン上で原文字のまま作成できる環境が整った。さらに、CAI/CALLを活用した学習支援に加え、インターネットの普及とともにeラーニングの開発が進み、柔軟な言語学習の場を提供できる時代となった。

しかしながら、その文字や地域の特殊性からアルメニア語（やグルジア語）の学習は、このようなリソースを十分活用するに至っていない。従って、アルメニア語のeラーニング教材の開発自体が新しい試みであることに加え、マイナーな非ラテン系文字を持つ言語のインターネット教材を開発する際に直面する問題点を指摘し、その改善のための提案ができることが本研究のもつ意義の一つである。さらに、単なる語彙集的な「オンライン辞書」ではなく、学習者にとって有用な情報を埋め込んだ電子辞書を作成し、eラーニング教材との連携を強化するシステムの開発を目指す点も本研究課題の特徴である。

2. 研究の目的

世界の文字を体系化したUnicodeを用いて、独特の文字を持つ言語でもパソコン上で容易に扱える環境が整い、eラーニングを活用した柔軟な言語学習の場を提供できる時代となった。しかし、アルメニア語は、その文字専用のUnicode領域が付与されているにもかかわらず、その学習は前述のようなリソースを十分活用するに至っていない。こ

のような現状を踏まえ、本研究では、アルメニア語のeラーニング教材の開発と電子版辞典の編纂を目的とする。小言語であるアルメニア語は、他の大言語とは異なる視点をeラーニング教材の開発にもたらす可能性を持つ。非ラテン系文字を持つ言語の教材を開発する際に直面する問題点を指摘し、小言語の教材開発に対する新たな道を示したい。さらに、学習者にとって有用な情報を埋め込んだ電子辞書を考案するとともに、eラーニング教材との連携を強化した学習システムの開発を目指す。

3. 研究の方法

まず、既存の紙媒体の学習書を対象に、提示されている文法項目を調査しデータベース化して整理する。次に学習書等で用いられている語彙を抽出してデータベース化し、不規則活用、格支配などの文法情報を加えていく。教材や辞書に用いるアルメニア語の例文等の適否については、言語コンサルタントに協力を請う。また、eラーニング関係の調査や文献収集のための出張を行うとともに、国外のアルメニア語教育機関への調査出張を計画している。教課からなる教材と辞書を試作し、改良を重ねていき、最終的には、開発段階であきらかになった問題点やその解決策の提案をまとめ、それに沿った教案を作成する。

4. 研究成果

アルメニア語のeラーニング教材の開発と電子版辞典の編纂という目的が達成されれば、eラーニング教材の開発に他の大言語を対象とした場合では得ることができない視点をもたらす可能性が高いと考え、研究を進めてきた。

初年度から構築してきた文法・語彙のデータベースを構築してきた。その中から重要なものを抽出し、互いに有機的に関連づける方策を考案し、学習教材という視点から整理した。非ラテン系のアルメニア文字の提示という問題に重点を置いて、統一的な総合的教材のデザインを意識しながら、教材サンプルを作成した。教材作成および電子辞書構築の過程を通し、特殊な「小言語」の電子教材を作成するためのノウハウが蓄積され、それらがこの分野の研究の次の段階に活用されることが、本課題における学問的期待の一つである。当該の教案サンプルによってそれが部分的にでも具現化できたと思われる。

また、電子教材の総合的開発という点については、語彙間、文法情報間、辞書とeラーニング本体との間、等のクロスレファレンス機能を備えた教材と辞書との連携を密にしたシステム構築をめざしたが、技術的な能力不足のため、十分に実用化できるまでには至

らなかったものの、クロスレファレンスに関する情報を文法・語彙データベースに埋め込み、システム的设计図となるように改良した。その結果、基礎資料として蓄積した当該のデータベースそのものが、eラーニング教材とは独立させても、今後のアルメニア語研究にとって大いに役立つ付随的成果となった。

今後のeラーニング教材は、固定のPCではなく、タブレット端末等の新しい機器を意識する必要がある。フォント書体の利用の可否など、本課題の成果をそのまま移植するのは技術的には容易でない面があるだろうが、小言語のeラーニング教材開発における初期段階の諸問題については解決の道筋を提示できたのではないかと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 岸田泰浩、言語類型論は日本語学に貢献できるか、日本語研究論集、査読無、(2013)

[学会発表] (計2件)

① 岸田泰浩、アルメニア語の動詞における地域的・類型的特点について、ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会、2011.2.19、京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター

② 岸田泰浩、言語類型論と日本語学、大阪大学・チュラーロンコーン大学・タマサート大学院生国際シンポジウム、2012.8.28、チュラーロンコーン大学 (タイ・バンコク)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岸田 泰浩 (KISHIDA YASUHIRO)

大阪大学・日本語日本文化教育センター・
准教授

研究者番号：40273742

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：